農業支援ボランティア〈新生おおつち〉　5~8班

5～8班の28名が向かったのは、4グループの中で最も遠い地点です。バスの車窓越しに流れる大槌川を見ながら、上流へ走ることおよそ20分、緑豊かな山あいにある新生おおつちの農園に到着しました。

ここは、自分で耕作できなくなった高齢者から休耕田を借り受け、雑草を取り除き石を掘り起こして開墾した畑で、主に野菜が作られています。

今、ネギやピーマンなど収穫の近い作物もある中、この暑さで雑草が猛烈な勢いではびこってしまい、困っていると言います。今日は、その草むしりを中心とした作業です。温かく出迎えてくれた代表の越田勝氏に注意点を伺い、さっそく作業にかかりました。

畑に入ると、ネギの畝の間にも、雑草が入り込んでしまっています。誤って作物を傷めてしまわないよう、慎重に、かつ手早く雑草を抜いていきます。

緑の部分だけでなく根ごと取り去るのは意外に大変で、腰を入れ、軍手でしっかり握った草を力を込めて引き抜くと、たちまち草いきれが辺りに満ちます。

中腰の姿勢を長くとるのは、体力のある高校生にもなかなかつらかったようですが、作業を繰り返すうちにコツをつかんでどんどん集中していき、黙々と草の山を築いていきます。土中から掘り出された石も手押し車で運び出し、畑は見違えるようになりました。

作業を終えた参加者に、越田氏から笑顔で感謝が述べられ、続いてこの農園の背景について語られました。

新生おおつちは、震災で家や家族を失った沿岸部の安渡地区の住民たちが、高齢者の見守りなど地域貢献を目的に結成した会で、元レスキュー隊員の越田氏をはじめ、農業とは無縁のメンバーばかりでした。

震災後、仮設住宅や独居などで孤立し、アルコール依存症などに陥る人が後を絶ちませんでした。高齢者も、特に男性は外のコミュニティに参加したがらず、部屋に引きこもってしまいがちです。

そのような人々の見守り活動をしていく中で、彼らには生きがいと居場所が必要だと考え、始めたのが農園でした。迎えに行ってでも、とにかくここまで来てもらい、農作業を通じて、仲間を増やしてもらおうとしたのです。

野菜作りには、彼ら以外にも学生ボランティアを受け入れ、収穫祭などで交流を図ります。収穫した野菜や花は、朝市やイベントで販売し、作業してくれた人の収入や活動費の一部に充てています。

畑の野菜は、昨春から始めた子供食堂（地域食堂）にも提供しています。地元住民のボランティアで運営されるこの食堂は、特に子供など、地域との関係が希薄な住民が、少しずつ人と触れ合えるよう支援するものです。月に1度、40人ほどが集まり、地域コミュニティ再生の場となっています。

引きこもりの人々を外に出した野菜が、地域のお母さんの手で子供たちに振る舞われ、触れ合いの場となる、そんな好循環の小さな一助となれたことに、参加者も誇らしげな様子でした。

新生おおつち
代表　越田 勝氏

今日は、被災地を忘れず、遠い所をありがとうございました。短時間で本当によくやっていただきました。これまで 400 以上の団体やボランティアが来てくれた中で、一番すごかったと感心しております。皆さんがこのまま立派な人になるのを楽しみにしています。

●参加者の感想

短時間で少しのことしかできなかった。しかし、それだけでも喜んでもらえたのが嬉しかった。	生徒
「天災は忘れた頃にやってくる。」これは間違いである。ボランティア受け入れ先の方のお話では、数年、数十年ごとに災害は起こっている。だから「天災はいつ、どこで起こっても不思議ではない。」	生徒
日常の仲間とはまた違って、キャンプで出会った他校の人と一緒に活動することが楽しく、あっという間にボランティアが終わってしまった。今後もこのようなボランティア活動に参加したい。	生徒
震災後、仮設住宅で暮らすことを余儀なくされている人々を孤独にしないために、一緒に農作業をすることを勧めているとのことであった。人と人とのつながりがあり、互いにコミュニケーションをとることから、日常の生活が豊かになることを教えてもらった。	教員
猛暑の中での作業は大変なものがあったが、地元の方々の感謝の言葉を聞き、達成感があった。	教員

農業支援ボランティア〈大槌町 菜の花プロジェクト〉　9～12班

9～12班の28名が向かった先は菜の花プロジェクト、大槌川の河川敷一面に菜の花を咲かせようという活動です。

サケの遡上で有名だった大槌川には、津波が何キロも遡上し、汚泥や瓦れきで埋め尽くされました。プロジェクト代表の金山文造氏は、震災で亡くした同級生たちと駆け回った河川敷の惨状に心を痛め、一人で瓦れきを撤去し始めます。

そして供養のため、さらには残された人々のために、菜の花畑を作ろうと思い立ちました。直接の復興にはつながりませんが、皆を癒し励ましたかったと言います。

菜の花の栽培は土壌の塩分を吸収するので、海水で使えなくなった水田の再生や、バイオ燃料として地域の通学バスでの利用など、実用面でも効果が期待できます。

プロジェクトに賛同し、参加したボランティアは、最初の1年だけでも延べ1万人以上に上ったようです。

到着すると、広い河川敷は枯れ草で覆われていました。この翌月には、来春に向けて種まきをする予定とのことで、今回はその土壌作りの前段階として、草取りをお手伝いすることになりました。

参加者たちはそれぞれに慣れない農具を手にし、鎌で刈り取ったり、すきでかき寄せたりした草を、手押し車で運んでいきます。猛暑の中で汗を流しての厳しい作業でしたが、絵本のような干し草の山ができていくにつれ、時折、歓声や笑顔も見受けられました。

金山氏は終始笑顔で参加者を見守り、皆がそこここにまとめた草を、自ら軽トラックで集めて回ります。

こうして集めた雑草は文字どおり山積みとなり、きれいになった河川敷に、金山氏の感謝と喜びの声が響きます。記念として菜の花の種を大量に頂き、参加者全員で分けました。学校でプランターに植えたいと、嬉しげに話す参加者もいました。

そして場所を変え、金山氏御自身が描いた紙芝居で、震災の体験談を伺いました。

津波が襲って来た時や、避難所で過ごした様子など、15分ほどの内容でしたが、身振りや表情豊かな独特の語り口に、参加者たちはその場にいるかのようにひき込まれていました。特に避難所での人々が不安に満ちた様子、おびえる子供たちの様子は強く印象に残り、金山氏のお人柄を感じたという声が多く聞かれました。

来春、菜の花が一面に咲き広がる風景を心に描きながら、様々な思いを胸に、河川敷を後にしました。

菜の花プロジェクト
代表　金山 文造氏

今日は暑い中をありがとうございました。皆さんに作業していただいたお陰で、来月無事に種をまくことができます。この活動の継続には、全国の方々の御協力が欠かせません。皆さんからも、ぜひ大槌の菜の花プロジェクト活動の話を広めていただき、より多くの人に知ってもらいたいと思います。更なる御支援を頂ければ幸いです。

●参加者の感想

正直疲れている気持ちがあったが、紙芝居を聞いて「様々な思いが詰まった菜の花畑作りに携われることが光栄である。」という気持ちに変わった。	生徒
ボランティア受け入れ先の方は、震災後に景色を元に戻したいという思いで菜の花を植える活動をしていた。その考え方とあきらめない気持ちを見習いたい。	生徒
活動をしてみて、復興への道は地元の方同士の力が必要になってくること、自分たちにもできることがあることを学んだ。	生徒
ボランティア受け入れ先の方の話を聞き、改めて東日本大震災の恐ろしさを感じるとともに、自身の心構えが変わった。	生徒
作業後には、ボランティア受け入れ先の方の自作の震災当時について描かれた紙芝居を読んでいただいた。この体験を通して、復興支援といってもいろいろな形があるということを学んだ。事前学習で学んだ「元の状態に戻すことが復興ではない」という言葉の意味が、この体験を通してとてもよく理解することができたと思う。	生徒